

# 弘大地理10年の回顧

横山 弘

雑誌の刊行においても、行事の開催においても10年という期間は一つの区切りを示すものとして、記念号とか記念会とか銘をうって、祝う風習がある。事を始めることはたやすいが、継続することは仲々容易でない。10年間ある事を継続できたことは、それなりに有意義であり、めでたいことである。弘大地理も1965年に第1号が発刊されてから、丁度10年になる。したがって、10年間の歩みを回顧することも有意義であると思い、筆を執る次第である。

弘大地理発刊の趣旨は大学生活の総括としての卒業論文を、卒業生ならびに広く地理学研究者に見て貰って、批判をあおぐためになされたものである。論文内容を全部掲載することは困難だったので、その要旨をのせることにした。したがって、卒論内容を十分に表現できなかったきらいがない訳でもない。しかし、要点を簡潔にまとめることも大事な研究の一つである。

弘大地理10号までの卒業論文の掲載されたものは74編になるが、その研究内容について見ると、大分バラエティーにとんでいる。その中で最も数の多いのが都市地理に関するもので18編に及んでいる。これは指導教官の関係もあると思うが、地理学会の中でも都市地理が一つのブームをひきおこして、地理学評論・東北地理・人文地理等にも都市化や都市構造に関する論文が多く掲載された時期でもあり、県内の都市にも都市化の著しい傾向が現われ、都市問題が論じられるようになった時期と一致する。卒論においても、都市化の問題を扱ったのが多く、次いで都市構造・都市災害・都市の非行少年の問題を扱ったものまで広い研究がめだっている。

次いで多いのが農業地理に関するものが15編あり、農業県の性格を示している。とくに青森県はりんごの産地として全国的に知られ、農業の中でも重要な地位を占めている。したがって、りんごの土地利用の変化に関するものが多い。かってりんご地域の大半を占めていた紅玉や国光が、経済的变化や消費者の嗜好変化などにより、新品種に席を譲り渡さねばならなくなったが、その地域の変化を考察しようとするものである。この様な研究は今後も続けてなされねばならないだろう。また、津軽地方は水田地域でもあり、稲作経営や農業水利権、耕地整理に関するものがとりあげられている。

第3に多いのが地形に関するもので、13編あり、これも指導教官の影響によるものである。津軽平野の地形・青森平野の地形・小川原湖岸地形・下北の砂州及び海岸段丘・庄内砂丘・岩木山の泥流・岩手山の泥流・南八甲田の周氷河地形と県内の各地に及んでいるほか、山形県や岩手県にも及んでいる。10年前までは卒業論文に地形の研究は殆ど見当らなかった。自然地理専門の教官がかっていなかった為とも考えられる。

以上の分野以外になると、論文の数は少くなるが、それでも気候に関する研究が2編あることは大変貴重であると思う。しかも、この2編は女性によって研究されている。自然地理というと、女性研究者が少ない傾向をもっているが、気候の場合には資料を収集してその分析を行なうので比較的やり易いためであろう。今後は地形の女性研究者も育ててほしいと念願するものである。工業に関する研究は新産都市八戸をもっている青森県として、もっと多くの研究があつていいと思うが、4編掲載されている。しかし、八戸市に関するものは1篇で、他は青森・弘前の地場産業に関するものと伊勢崎の織物工業に関するものである。今後は近代工業の地域構造に関する研究にも目を向ける必要があろう。三方海に面している青森県にとって、水産業も重要な産業であるが、それに関する論文は3篇にすぎない。八戸のいか釣・むつ湾の浅海養殖・下北半島の水産業とそれぞれの地域構造の分析がなされている。近海漁業の不振などから、テーマとして選ぶのに意欲がわかないことも一つの理由だろう。その他、災害に関するもの3篇、林業に関するもの2篇、集落に関するもの2編、地誌的研究が2篇となっている。

研究対象地域は県内が最も多いが、年々他地域にも拡大され、東北地方から更に北海道、新潟県群馬県と広範囲に及ぶようになった。これも地理研究室所属学生の出身地が広域性を帯びてきたことによるもので、それぞれの出身地の研究がなされるようになった。今後は小地域のみにとどまらず、中地域、大地域の研究にもとり組んでいく必要があろう。

弘大地理には卒業論文の他に、教官及び卒業生の寄稿があり、弘大地理を通して先輩と後輩のつながりをより綿密にしていくことが必要なことである。